# 教職大学院 Newsletter No.138

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2020.8.19（公開版）


## Agency を育む学び

### ～共に創るプロジェクト学習～


福井市安居中学校 校長 牧田秀昭


タイトルは、本年度の本校の研究主題である。昨年度から協議を重ね、4 月 22 日に決定した。私が押しつけたのではなく、むしろ静観の側であった。実に素敵で誇らしいテーマであり、中身のある議論であったと思う。昨年度は「主体的に探究し創造する生徒の育成～協働して学びを深める指導の工夫～」と、文句の付けようのない研究主題だったが、ただ 1 つ私が引っかかったのは、研究主題を聞かれた職員が戸惑いの表情で資料を探す姿であった。本校には「生徒が主役」という開校以来の理念があるが、このテーマによって、具体的に教師協働の促進が一層期待できる。

移転独立開校 9 年目。もちろん開校当時の教師は 1 人もいない。生徒数も約半数に激減。前例踏襲はそもそも不可能な状態である。だからこそ、この状況をチャンスと捉え、全員で新たな学校づくりの挑戦を始めた。「生徒全員が発表者となるポスターセッション」「生徒が参加する授業研究会」「1 人 1 本の授業実践記録の執筆」等の実践を重ねる毎に、目に見えて成長する生徒の姿を、生徒・教師共に実感しているところである。

昨年度創設されたことのひとつに、「サマー／オータム・プロジェクト」がある。「総合的な学習の時間」を中心に特別活動、道徳をつなげ、時期に応じた生徒主体の探究的なロングスパンの学習を組織したのである。学校祭までは、主に 3 年生のリーダーシップによる異学年での特別活動の中で自己肯定感を高め、1 年生も学習や生活のルールを身につけていく。秋からは学年毎にテーマを設定し、地域と繋がり地域に貢献する総合的な学習を進める中で、地域に生きる人材育成を目指す。今年度は、このプロジェクトの実践を、より生徒主体にしたものに洗練していくことに加え、教科プロジェクトにも積極的に取り組んでいこうと、新メンバーを加えた教職員全員で確認したところであった。そんな中、コロナ禍が訪れたのである。

生徒がいないことには何も始まらない。もし授業再開となっても、様々な制限の中、サマーもオータムもない。しかし、奇しくもこのコロナ禍のお陰で、本校の教師 Agency の土壌が確実に醸成されていたことを実感することとなったのである。6 月のラウンドテーブルで本校教師からの報告にあったように、「彼女の弁当と一緒で、手作り感が愛情を伝える」動画配信や個別面談が、教師達の発案で実現していった。そして授業再開後は、生徒主体の新たな地域貢献の取組が始まった。生徒が職員会議で提案することも増えてきた。生徒と共に「考える」教師集団になってきている。教職大学院拠点校の本校は、ありがたいことに、生徒や教師達のこのような取組に大学スタッフが同席してくださっている。継続して見てもらっているからこその貴重な価値付けは、我々にとって何より心強いことである。連合教職大学院となってどんどん規模が拡大しているようだが、現場の教師に寄り添う立ち位置と、格調高くもきめ細やかな御指導を今後ともお願いしたい。

そして、本校は、今年度初めてインターンシップ

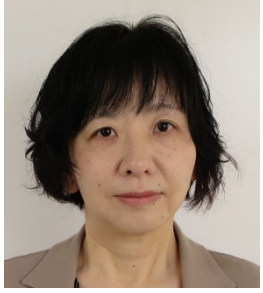
内容


巻頭言（1）
スタッフ自己紹介 （2）
院生自己紹介 （3）
インターンシップ/金曜カンファレンス報告（17）
ミドルリーダー/マネジメントコースだより（18）
6 月ラウンドテーブルをふり返って（22）
第 1 回入試説明会お知らせ（28）

の院生を受け入れることとなった。臨時休業中から、動画作り等でお世話になっている。授業や学校行事、そして部活動にも積極的に参加してもらっている。先日は、本校国語科の公開授業を一緒に参観したので、授業づくりについて話をする機会を持った。授業者の立場に立って共感的に授業を見ており、何より子どもの姿をしっかりと追っていたのに感心した。いろいろなことに疑問を抱き、周囲の教師達と話をしているようである。我々にとっても気づかされることは多く、「2 年目のマンネリ」を防ぐことにつながるだろう。考えをまとめるには「語り」が大切である。語っている中で、本当に大切なことが見えてくる。それを書き言葉にすることで、一層の成長が促されるであろう。息の長いインターンシップ。「共に」考え、実践することで、「共に」成長できればと願う。

強烈なリーダーシップを発揮して「俺についてこい」というタイプの管理職もいるだろうが、これでは指示待ち人間を量産してしまうのではないかと思う。「これをやると面白そうだからみんなでやってみない？」といった台詞がどこからでも自然に湧いてくるような学校風土を築くことが、これからの管理職に求められているのではないだろうか。教師自身が「Agency を育む学び」をしている学校でこそ、子どもたちに Agency が育まれると思う。そんな学校に楽しみながら一歩ずつでも近づくことを願っている。

## スタッフ自己紹介



# コロナ禍の先に

福井県教育総合研究所　先端教育研究センター　主任（指導主事）/
福井大学連合教職大学院 准教授　**朝倉 智子**

今年度、福井大学教職大学院のスタッフに加えていただくことになりました、福井県教育総合研究所の朝倉智子（あさくらともこ）です。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年 4 月に教育総合研究所に赴任し、学校現場を離れて 2 年目に入りました。新採用は丸岡高校で、定時制・全日制両方の勤務を経て羽水高校に異動、学校群制度撤廃の節目の年に藤島高校に移り、15 年間も居座ってしまいました。今でも朝うっかり藤島高校に向かってしまうことがあります。昨年度は、久しぶりの異動に加え初めての行政職ということで、とまどうことばかりでした。今回のコロナ禍で、「当たり前と信じていたことが当たり前ではない」と感じられた方も多いと思います。高校で教壇に立つことが日常だった私にとって、行政への転出は同様の体験でした。所内では、昨年度は教科研究センターに所属し、課題解決型学習や主権者教育・ふるさと教育に関わる仕事をさせていただきました。国語科の教員としては専門外なことも多く、精一杯やったつもりではありますが、肩身は狭いし自信は喪失するし…という 1 年間だったように思います。今年度は先端教育研究センターに移り、このように教職大学院と関わる仕事や研究所の総務のような仕事もさせていただいています。今年度の仕事は誰がやっても専門外なので気が楽になったのか、1 年経過して厚かましくなったのか、新鮮さを感じながら昨年度より前向きに取り組めているように思います。

自分の教員生活を振り返ってみると、目の前の生徒たちとの濃密な人間関係の中で日々を過ごし、生徒たちが成長して卒業していくのを見届けることが何よりの幸せ（同僚から「卒業式フェチ」だと言われたことがあります）、そして卒業後も元気で活躍している話を見たり聞いたりすることが、次への活力と教職への誇りに繋がっていたように思います。

しかし、340 名の生徒を抱える学年主任を務めたことで、「俯瞰する」ことの大切さも感じるようになりました。生徒との濃密な関係は、時に「近視眼的」になり過ぎる危険も孕んでいます。「近視眼」こそが、

教職の魅力だとも思うので悩ましいのですが、少し離れたところからクラス・学年・学校を客観的に見ていくことも大切なのだと、見方の転換を迫られた気がしました。行政職になってそれが更に、県内の学校全体、ひいては教育というもの全般に広がったように感じています。今年、このように教職大学院の先生方や様々な経歴を持つ院生の皆様と関わる場を得たことで、また違った見地から教育について考えることができ、自分自身の視野を広げる貴重な機会をいただいたと思っています。

とは言え、コロナ禍で大変なときに学校現場を離れていることは、厳しい状況の中で戦線離脱しているようで、後々コンプレックスを感じそうな気もします。現場には一気に ICT 化の波も押し寄せており、戻ったときにはまさしく浦島太郎の気分なのではないかと不安もあります。

「不易流行」という言葉があります。「流行」と聞くと簡単に消えてしまうような軽い印象になりがちですが、松尾芭蕉が使った本来の意味は違います。「流行」とは常に変化して新しくなること、そして「不易」とは永遠不変の価値とは言っても、常に新しい境地を求める努力の中で実現されるものだという考えです。つまり「不易」と「流行」は一体であり、対立するものではありません。これは学校現場にも当てはまることではないでしょうか。コロナ禍は学校に急激な変化を迫りました。10 年～20 年分の変化が 3 か月余で起きたようなところもあるでしょう。しかしその中のいくつかは、新しい時代に合わせていずれ起こる変化だったはずで、このような変化を乗り越えながら、「21 世紀の学校のあり方」という「不易」を目指して進化していくのだと思います。

それでもなお、「学校は人と人との関係の中で子どもたちが成長していく場である」ことだけは、変わらないし変えてはいけないと私は思っています。学校ほど同世代が集まって生活する場は他にないという点で、生徒同士の関係はもちろん大切です。しかし、保護者以外の身近に接する大人という点で、教師と子どもの関係もとても大切だと思います。システムや授業のやり方、カリキュラムなど、多くの変化に対応しつつも、教師は子どもと関わること、成長をサポートすることが本業であるという信念だけは忘れず、時代に合わせ生徒たちの成長に合わせながら、自分自身も変化していきたいと考えています。

# 院生自己紹介

## 森阪　美文　もりさか　みふみ

今年度より、学校改革マネジメントコースで 2 年間学ばせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。

私が教職大学院で学びたいと考えたのは、教員としての自分に物足りなさを感じたからです。1 人息子もとりあえず就職し、親の介護まで多少の猶予がある今、その物足りなさを埋めたいと思うようになりました。そして、私にとって今こそが学び直しに絶好の時だと思ったのです。また、越前市から初めて福井市内の学校に赴任してきた時、学年主任としてお世話になった淵本先生が大学院で教鞭をとられていることも入学のきっかけとなりました。

「女は男の 3 倍努力しなければならないのよ」ご夫婦で中学校数学の教員を続けてこられた大先輩からの言葉です。私は何をするにも要領が悪く時間がかかり、教員としても親としても失敗ばかりでした。話を聞いていただいたりアドバイスをいただいたり、大変お世話になりました。その大先輩でさえ、こんなことを考えながら教員生活を続けていらっしゃったのか。はっとさせられた瞬間でした。また、他の先輩

からは「人生をやり直したいと考えたことはあるか」と何かの話のついでに問われ、「疲れるのでもうやり直したくないです」と答えたこともあります。

採用から現在に至るまで、私にとって中学校現場はやりがいはあったけれど、決して甘い場所ではなく、毎日が必死だったように思います。そして多くの先輩方に支えられどうにかここまでやってこられました。周りを見回したり、後ろを振り返ったりする余裕もなかった自分。がむしゃらすぎて気づかなかった本当に大切なことを、2 年間で少しずつ見つめ直していきたいと思います。これからの学校が、生徒、教員、双方にとって、さらに楽しい学び合い（愛）の場となるためにはどうすべきかも考えていけたらよいと思います。

入学よりまだ 3 か月しか経っていないのですが、ZOOM を通して、様々な校種の先生や大学院の先生、教育関係で活躍中の方々からお話を聞く機会を得て、学びのコミュニティの重要性を実感し、その機会に感謝しています。直接お会いできる日が楽しみです。今後のカンファレンスやゼミ、ラウンドテーブル、集中講義等、その度ごとに学びをしっかりと省察し、実践につなげていきたいと思います。

## 川端 宏明　かわばた　ひろあき

今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました川端宏明と申します。越前市武生西小学校に勤務しています。2 年間、どうぞよろしくお願いいたします。

あれは昨年 11 月のことです。「川端くん、ちょっと校長室に来てくれるか？」と前任校の校長先生に声をかけられました。「俺、何かやらかしたっけ？」とあれこれと自分の体を叩いて埃を払いつつ、恐る恐る校長室に入ると教頭先生まで待ち構えているではありませんか。「きっと何か大変なことが起きているんだ・・」と背中を冷たい汗が・・。しかし、校長先生の口から出たのは、意外な言葉でした。「大学院行かんか？」人間、意外な言葉を聞くと、漫画のような返事をするようです。「へ？」と返した私の顔はきっと間の抜けたものだったに違いありません。その後しばらく校長先生と教頭先生から二人がかりで説得されましたが、実は話を聞いた瞬間、自分の中で答えは出ていました。私は、決して優等生な教員ではありません。思い付きや勢いのみで突っ走り、多くの先生方に迷惑をかけてきました。しかし、そんな自分を認めてくれ、期待してくれている。それで十分でした。また、自分に足りない部分を大学院では多く学べるとワクワクもしました。

私には、お一人、感謝してもしきれない恩師がいます。私は高校時代、いわゆる落ちこぼれ生徒でした。勉強する意味を見出せず、意欲というものをどうしても持てなかった私の成績は、それはもうひどいものでした。当時の進学校において、成績が悪く平均点を下げるだけの存在であった私は、きっと「いらない生徒」だったに違いありません。（勝手にそう思っていただけかもしれませんが。）2・3 年生時の担任は、日本史の M 先生でした。もともと日本史が好きだった私は、唯一その先生の授業だけは真面目に聞いていました。3 年生の夏休みのある日、M 先生に呼ばれ、「織田町で発掘作業をしていて、そこに学芸員の方もいらっしゃるから、発掘作業の手伝いに来なさい。」と言われました。当然受験勉強などまったくしておらず、時間を持て余していたので、暇つぶし感覚で了承しました。しかし、行ってみると、真夏の炎天下での作業は過酷で、大発見があるわけでもなく、ただひたすら地味に地面をハケでこするだけの単純作業にあっという間に辟易してしまいました。その時、学芸員の先生とも話をさせていただきましたが、特別給料がいいわけでもなく、作業もこのように地味だし過酷だし、よほど好きじゃないとツライ仕事だ

よ、と当時の私には、夢も希望もないような話を聞いただけでした。

しかし、今になってようやくあの時 M 先生が私にしてくださったことの凄さとありがたさがわかります。なんで俺だけこんな目に・・・程度にしか思わなかった当時の私に説教したいくらいです。M 先生は、唯一日本史だけは好きで、人並の点数を取れていた私に、なんとかそこから前へ進むきっかけを与えようとしてくださったのだと思います。今、教職に就いて、どんな子どもでも見捨てず、なんとか支えようと一生懸命に支援しようとすることの大切さと難しさが身に染みてわかります。もしかすると、M 先生が担任でなかったとしたら、今の私はないかもしれません。当時は解っていませんでしたが、確実にあの頃の私は M 先生に救われました。感謝の言葉を伝えられぬまま時間だけが過ぎていきましたが、偶然にも数年前、M 先生がご退職の年にお会いすることができ、教職に就いたことを報告し、感謝の気持ちを伝えることができました。20 年以上ぶりに会った先生は、私に「川端くんならいい先生になる。」とおっしゃってくださいました。教師としての在り方に悩んでいた私は、また M 先生に救っていただきました。

私たちのやっている日々の実践は、目に見えてすぐに効果が表れるものではないかもしれません。また、コロナ禍はもちろん、教育が抱える問題は多様化・複雑化しており、課題は山積みです。しかし、答えが見えないからこそ、学び続けなければいけないのだと思います。今後どんな状況になろうとも、変わらず大切にしなければならないことは、子どもたち一人一人に寄り添い、大切に思う気持ちだと思っています。子どもたちが豊かな人生を歩んでいくために、自分がしてもらったあの時のように、出来る限りの支援をしたい。そのために、もっともっと力量を高めていかなければならない、と思っています。教職大学院では、多くの先生方との交流を通して、自身の実践を振り返ることで学び、日々の実践に生かしていきたいと思います。4 月からのカンファレンス等で、すでに今まで自分にはなかった新たな視点を数多くいただくことができました。与えていただいたせっかくのチャンス、これからも積極的にいろいろな先生と関わる姿勢を大切にしていきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

## Michael Wilson Rosero マイケル　ウィルソン　ロセロ

Hello! My name is Michael Wilson Rosero. But most people call me “Mhawi”. I am from Masbate, Philippines.

I am a graduate of linguistics but my research work on Philippine languages has allowed me to engage with Filipino teachers and local researchers. I have become an advocate of the mother tongue-based multilingual education (MTBMLE) program, working with leading researchers in various fields (linguistics, language documentation, speech language pathology). We conducted fieldwork in various areas in the Philippines and organized local workshops on grammar and language materials development. Through this, I became familiar with issues that teachers in the field often encountered in their profession, e.g., lack of knowledge and understanding of the new MTBMLE program, lack of materials to be used in teaching mother tongue, lack of access to professional development opportunities, among others.

From 2014-2018, I joined the Philippine National Research Center for Teacher Quality (RCTQ) as a research officer and was mainly involved in the development of the Philippine Professional Standards for Teachers (PPST), a document that articulates teacher quality in the country. This further provided me an in-depth knowledge of the issues related professional development of teachers and teacher quality. In 2017, the Department of Education (DepEd) adopted the PPST through Department Order No. 42, s. 2017 and mandated its implementation nationwide. The new set of standards was used as the basis for the

teacher performance assessment system and other human resource systems. I transferred to the Department of Education in 2019 and worked as a project staff in-charge of providing technical inputs and assistance to ensure that human resource systems, such as the RPMS, are implemented and functional. I was in-charge of the management team that trained the national trainers and facilitators on the RPMS. I also took charge of addressing the concerns related to the RPMS.

My experience in the research center and DepEd allowed me to interact and engage with teachers, school leaders and teacher educators across the Philippines. Through focus group discussions, interviews and classroom observations, I learned about the realities of the Philippine education system and the challenges that the Philippine education system is currently facing, as well as possible solutions to these concerns. As the Philippines is also moving towards reforming the quality school leadership and provision of professional development for all school personnel, I realized it was necessary to learn more about other models of professional development. The collaborative nature of DPDT of the University of Fukui and its work on lesson study piqued my interest. This convinced me to join the school management reform program of the Department of Professional Development for Teachers (DPDT) of the University of Fukui.

The new set of professional standards for teachers has put a premium not only on content knowledge and pedagogy but also on collaboration among colleagues and personal and professional reflection and learning. To further deepen my knowledge on this, I would like to immerse myself in lesson study, a model of professional development that Japan is known for and somehow related to Philippines' own model, the learning action cell. I am interested in how teachers develop their reflective practices and cultivate healthy and lively professional learning communities and how this translates to quality teaching and learning. I wish to share this to my fellow educators when I go back to the Philippines.

## 遠藤　健　えんどう　たけし

今年度より、学校改革マネジメントコースで学ばせていただくことになりました遠藤健と申します。教員になって 24 年目になります。福井県の私立高校 1 校の 1 年間を挟み、静岡県の公立高校 3 校に 10 年間勤務した後、今年度に静岡県立駿河総合高校に転勤するまで富士市立高校に 12 年間勤務しました。富士市立高校では、前身の富士市立吉原商業高校に商業科教諭として 4 年間、再編統合を経て新設された同校の探究主任として 5 年間、富士市教育委員会富士市立高校教育推進担当指導主事として 3 年間の合計 12 年間勤務しました。

これまでの教員生活の中で、富士市立高校で学校改革に関わったことが、今回大学院で学びたいという強い気持ちにつながりました。富士市立高校では、生徒の学びに主体をおき「自律する若者」という明確な目指す生徒像を打ち出しました。探究的な学びやそのプロセスを通じて社会で必要な力を伸ばすとともに、生徒自身がもともと持っている興味関心力を高め、高校を卒業した後も自走し続けることができるような授業づくりやプロジェクト学習を構築してきました。育てたい生徒像は明確で、学校や市の教育委員会、学校運営協議会のメンバーは同じ方向を目指していました。理想は共有できていましたが、この理想をどのようにしたら実際に生徒に力として身につけていくことができるのか。未来を担う若者のために何ができるのか。生徒を取り巻く現場の教員、地域の大人、行政機関に求められました。様々な課題がありましたが、「自律する若者」の実現に向けチーム学校を目指して取り組んできました。その結果、富士市独自のカリキュラム・マネジメントが確立された

と感じています。それは、卒業生や地域の方々からの言葉から読み取ることができました。そして、学校に探究という文化ができたことで今までにない授業、今までにない地域・行政・企業とのつながりを生み出すことができました。

最後に、富士市立高校では 5 年間は主に生徒主体の探究的な授業づくりと地域連携に取り組み、その後の 3 年間は指導主事として学校マネジメントに関わる中で、3 つの想いが芽生えました。ひとつは、さまざまな書籍を読み進めるうえでもっと理論を学びたい。もうひとつは、教員だけでなく人とつながる中で新しい学びの環境を創り出したい。そして若手教員に今までの経験を伝えていきたい。この想いが大学院で学ぶ私のエネルギー源となっています。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

## 松見　眞希　まつみ　まき

この4月から学校改革マネジメントコースでお世話になっております、高浜小学校の松見眞希と申します。私の住む高浜町は福井県の西端、京都府舞鶴市との県境に位置する人口約 1 万人の小さな町です。名勝青葉山を背景に美しい若狭湾に沿って走る国道27号線から北側と南側に町が広がっています。主に観光業が盛んでしたが、舞鶴若狭道等インフラの発展により、宿泊を伴う観光客の数が減少しています。また地域の特性として昔から就職・進学等による若者の県外への流出が多い町です。人口減少や地元産業の衰退などの課題を受け、新たな別の地域活性化の道を探りつつ、町づくりが行われています。このような中、いつからか私は地元高浜町や福井県のために貢献してくれる人材を育成する事が大きな使命と感じるようになりました。どうすればふるさと高浜に強く愛着を持つ子どもが育つか、福井県民としての誇りが育つか、いつも考えています。

このコロナ禍の休業中に、学校では、子どもたちとどうつながるか、子どもの学びをいかに保障するかを模索してきました。そしてオンラインによるつながりの道を切り開くことができました。この教職大学院で始まったオンラインカンファレンスやマネジメントゼミのやり方を経験し、学んだスキルや知識を現場で活かすことができたおかげです。またオンラインを通して高浜にいながら皆さんにお会いできることがこんなにありがたいことだったのか、と実感する事が多く、環境整備にご尽力くださった大学院の先生方やスタッフの皆様には心から感謝しています。

この状況はまさに予測困難な出来事であり、今私たちは教育のプロとして、目の前の課題に若手や先輩、保護者や地域の方々など…様々な他者とよりよくつながり協働しながら解決していくことができるのかが問われているのだと思います。ここで必要とされる能力は、今後子どもたちが必要とされている OECD の示すコンピテンシーとまさに合致するものではないでしょうか。そして私たち 1 番身近な大人が新しいことに挑戦しようとすることを通して、そのコンピテンシーを体現しモデルを示そうとする姿は子どもたちも必ず見ている事と信じています。

25 年間の教員人生の中で初めて小学校に勤務して現在 2 年目となります。毎日子どもと接する中で全てのことが新鮮で活気のある日々を送っています。中学校勤務を経たことで、小学校での働き方の良さに気づくこともあれば、組織力の課題を感じることもあります。それらを踏まえ、今後の研究実践について、まだまだ具体的な考えはまとまりませんが、「学校を縦に貫く組織作り」を前から牽引するのではなく、後ろから巻き込むようにしてリーダーシップをとり、教員集団をまとめて行けるような動きを目指して自分なりに考えていきたいと思っています。

## 大野　靖幸　おおの　やすゆき

今年度、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学した大野靖幸と申します。

現在、福井県の嶺南地方にある美浜東小学校で5年生の担任をしています。美浜町は、6年前に町内小学7校が3校に再編されました。どの学校も同規模になり、他校との交流などを積極的に進めています。教職大学院に入学してからまだ数ヶ月ですが、合同カンファレンスやラウンドテーブル等で、教育について校種や職種を超えた多くの方々と意見交換することができ、これまで以上に有意義な時間を過ごすことができています。改めて多様な実践を聞き、自分のこれまでの実践と照らし合わせ、内省することの大切さを痛感しています。

新採用から20年ほど経ち、体育主任や生徒指導を中心に校務分掌を受けもつことが多いことから、必然的に高学年を担任することが多くなっています。そのような中で、これまで感じていることは、「高学年での自律した生活と学びの確立の大切さ」です。高学年の時期に、主体的に自己マネジメントできる力がつけば、それは「中1ギャップを解消することにもつながっていく」のではないか、さらにそれは「その後の自己の可能性を広げることにもつながっていく」のではないかと思います。

美浜東小学校では、主体的な家庭学習を実現するために、自主学習を家庭学習の中心にしています。私が担任をしている5年生の自主学習では、評価基準を設定し、児童が到達すべき目標をルーブリックにして三段階で評価しています。その項目は、「①学習時間　②考えのコラム化　③ノートレイアウト　④ねらいとふり返り」などです。毎回子どもたちにノートを返すたびに、友達と学びをふり返っています。まとめられたノートは、授業でのアウトプットするための材料につながっています。つけたい力を明確にしながら適切に評価していくことが、主体的で深い学びにつながっていくのだと思います。

自主学習のよさは、自己の学びを整理し表現するといった思考力や表現力を向上させるといった力を高めるだけでなく、それをささえる自己マネジメント力を含む、家庭学習力の向上にも深く関わっていると思います。

このような子どもの自律性や主体性を育てる教育のあり方は、新学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」にも深く関わるとともに、21世紀における生涯学習社会においてもますます重要になってくるのではないでしょうか。

今回、コロナウイルスの影響で入試以来一度も大学には行けていませんが、これからの二年間は、自己研鑽をしながら、いろいろな方々の実践に耳を傾け、教師として自分がやりたいことを明確にしていけたらと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

## 大井　和彦　おおい　かずひこ

この度、ご縁を得まして学校改革マネジメントコースに入学いたしました大井和彦と申します。よろしくお願い申し上げます。

私が教職を目指したのは、大学時代からお世話になっている恩師の先生方（元高校教員）の影響でした。謦咳に接する中で、教師という存在は生き方を示すそのものと思え、その先生方のようになりたいと思いました。

職歴としては、教科教育専攻の修士課程在籍中から非常勤講師（二年間）を始め、長野県の高校教諭（三年間）を経て、現任校（現在十五年目）となりました。長野県で奉職した学校は、農業高校でしかもスキー部（ジャンプ＆コンバインド）の顧問でした。その時

の同じ顧問で先輩の先生に、生徒とともに居ることの意義を学びました。

一転して、現任校は国立大附属校で、実践の裏には研究という要素が求められるところへと参りました。もともと教科教育専攻ということもあり、私にとっては「国語の教員であること」を考えることに大きな意義がありました。ことばと共に生きることを考える存在として、規範的な言語・言語文化と生活的な言語・言語文化との架橋をしたいと願い、子どもが「ことば」とともに生きていく主体であるための感性を育てたいと思って実践を重ねました。

一方で、現任校の行事の中には研究会が多く設定されていて、その中で培われた思考も出てきました。現任校の管轄をする教育学部はいわゆる教員養成系ではないため、その先生方からご指導いただく場合、方法学・心理学・哲学 etc.といったアプローチをすることが多く、教科というめがねではないツールを使った授業・生徒の見方や考え方に触れる機会が多くありました。そのような環境の中で、「子どもを育む（≠育てる）」とはどのようなことか、そのために我々は何をしているのか、また何ができるのか、どのような存在であるべきなのかを志向・思考・試行することへの関心が強くなっていきました。

現任校はある程度はそのことを考えていくことができる環境を持っています。しかし、キャリアの折り返しの年齢にそろそろさしかかる中で、自分の関心・意欲・課題意識を満たしていくには、自らをメタ認知するための知識と機会とが必要と思われました。そのようなことを考えていたときに、一度外で学ぶこともよいのではないかというお話を元同僚であった先生より頂戴しました。本務に従事しながら大学院に通えることへの魅力、そしてラウンドテーブルには過去に五回ほど参加させていただいてきていて福井への勝手に感じるご縁から、一念発起の末、ここに至りました。

私は大学時代より茶道の稽古を続けていますが、その理由の一つに自らが「教える」立場の職業であるが故「教わる」立場になることを持つという点があります。この度の教職大学院に籍を置かせていただけることは、もう一つの「教わる」立場を持つことができたと思っております。既に何度かのオンラインでのカンファレンスやラウンドテーブルでも、在籍されている他校の先生方のお話や教職大学院の先生方のお話をお聞きする中で、このところ私の中に欠けてきていたと自覚されるものや、やはり大切と思っているものについて再びその肌触りを確かめるような自分がいるという新たな感触の発見をしております。

現在の社会風潮として、悲しくも、教育の営みに対する不信感や教員という職業への批判が大きく取り沙汰されます。しかしここで、将来の社会を構成する主体としての子どもを育むことによって未来の社会に間接的に貢献する職業が教員である、ということを当事者である自らが再認識する必要を強く感じております。子どもたちより先にただ生きているだけのひとりの人間という存在として、人としてありたい自分の姿とは何かを考え、未来の社会への間接的な貢献を目指す存在としての教員という存在として、弱くとも誠実でありたいと考え、そのために私にとっての本来の専門である教科教育学と、私の関心が強くなってきている教育学との往還をこの教職大学院において自らが探究できたらと考えております。具体的な研究課題はまだ立てられていませんが、大切な一時を充実して共に過ごすよう自らが全力を尽くすための授業改善を個人ならびに組織としてどのように取り組むか、また、この職業の営みの意義を再認識し学校組織として前進するために、同僚性と多様性の担保による建設的な議論の土壌形成をいかにすべきかを、ことばの教育に携わってきた国語人としての思考や経験に、教育学的な知見を重ねることができたらと思います。

どうかご指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。

# 對比地 覚　ついひじ　さとる

はじめまして、学校改革マネジメントコース 1 年の對比地覚です。よく初対面の方から「（苗字は）何て読むの？」と言われます。大学を卒業してすぐに地元群馬で公立中学校の教諭として働き始め、現在は東京大学教育学部附属中等教育学校で理科を担当しています。小学校 6 年生から教職を目指してきましたが、そこには「学校」という仕組みにうまく合致しなかったがために才能を発揮できないで苦悩する友の姿を間近に感じ、そうした僅かなすれ違いで起こる不遇を解消し、「学校＝真に皆が活躍し、それぞれの長所を伸ばせる場」にしたいという願いがありました。念願かなって教壇に立ち、先輩方からたくさんのことを教えてもらいながら何とか教師の仕事を覚え、軌道に乗りかけてきた教師生活 5 年目にふと初心に返り、それまでの自分の実践について見つめ直す余裕ができました。そこで気付かされたのは、教室にいる生徒の強みは実に様々で、全員を生かすことがいかに困難なことかということでした。「どう教えたら分かりやすいか。どんな風にアプローチしたら勉強の面白さを感じてもらえるか。」「思春期の真っただ中にいて迷っている生徒にどんな支援をしたらいいか」「正しい方向を見つけ、そこへ向かって進む後押しするために何ができるか」など具体的なことを日々考え、目の前の出来事に一所懸命に対処することで充実した毎日を送ってきたつもりでいましたが、果たして自分が真に助けたかった生徒は救われたのか疑問が生じたのです。加えて、「学校」でうまく力を発揮できずにくすぶっている生徒だけでなく、むしろ力を削がれ、「学校」によって不利な状況に追い込まれている生徒が存在していることにも思い至りました。そこで打開策を図るべく、夏休み丸ごとかけて勉強し直し、今で言う「アクティブ・ラーニング」に挑戦し始めました。しかし、当時はそうした生徒主体の授業スタイルが一般には認知されておらず、自分の未熟さと相まって理解がなかなか得られないどころか、非難され、禁止される手前までいきました。管理職や教育委員会の先生方としては善意で勧告くださっているのであろうことは理解できたため、身をもって「学校」との不適合で苦悩する生徒の心境や状況を理解するよい機会となり、不遜にも「学校」システムのアップデートを図りたいという思いがより一層高まりました。その後、縁あって協働学習の素地ができている現在の職場に転職し、少しずつ自分なりのアクティブ・ラーニングを追求することができるようになってきました。その中で、生徒一人一人の主体的な学びを成り立たせていくために、これまでとは異なる教師の役割、特にマネージャーとしての資質を身に付ける必要が自分にはあることが分かってきました。

一方、職場でのポジションも徐々に“若手”から“中堅”へ移行し、最前線で生徒の指導に当たるだけでなく、学校運営に関わる機会が増えました。管理職や各分掌長のお手伝いをさせていただく中で、優れた先生が集まっているだけでは学校として成果をあげられず、組織として機能するように先生方の力量をうまく交通整理しなければむしろ事故が起こってしまうこと、ましてや改革となれば混乱は必至で、きちんとしたノウハウもなく進めれば大惨事にもなりうることに気付き、ここでもマネジメントについて学ぶ必要性を感じ始めていました。そんな折、以前の上司である福島昌子先生から 2020 年度から福井大学連合教職大学院の東京サテライトが開設されるお話を伺い、時宜を得た貴重なご縁と考え、2 年間こちらで学ばせていただくことに決めました。

これまでも他地方の先生とご縁がなかったわけではありませんが、基本的には関東圏にとどまっていたため、4～7 月のカンファレンス等を通じて主に福井の先生方を中心に色々な地方からいらしている先生方のお話を聞くことができ、教員としての視野の広がりを感じることができています。特に COVID-19 への対応は学校種・地域で事情が大きく異なり、内に籠って自分の学校のやりくりばかりに終始していたら分からなかった大きな発見(学校の在り方)がたくさんありました。この 15 年間、気付くと「話す」こ

とばかりに力を注いできた教師生活だったように思います。これからの 2 年間は多様な先生方から「虚心に聴く」ことをひとつ意識して、新たな学校の在り方やイノベーションについて探究していきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

## 三保谷　遼　　みほや　りょう

はじめまして。本年度より学校改革マネジメントコースでお世話になる三保谷遼と申します。みなさんと「縁」あって共に学ぶ機会を得ましたことをありがたく感じています。

私の勤務先は東京・新宿にある保善高等学校という私立の男子校です。現在のみずほフィナンシャルグループの祖、安田善次郎翁の遺志を承けて 1923 年に創立された本校は、2023 年にいよいよ 100 周年を迎えようとしています。ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんが、ラグビーや陸上では古豪として知られており、近年ではサッカーやバスケットボール、そして空手道といった競技にも盛んに取り組んでいます（インターハイで保善生を見かけることがありましたら、ぜひ応援してやってください）。その一方で、進学指導にも力を入れているところであり、難関大学に現役で進む生徒も数を増やしつつあります。建学の精神は「実学尊重」、「剛健質実」、「報本反始」、「初志貫徹」。文武両道を目指している、どちらかといえば（いい意味で）硬派な学校です。

と、ここまでは調子のよいことを書き連ねてまいりましたが、ご多分に漏れず、本校も昨今の教育改革や少子化といった事象に対応できるよう〈生き残り〉を目指した学校改革の必要に迫られています。遅ればせながら本校でも昨年から学校改革に向けたプロジェクトチームが発足し、私もその一員として、これまで経験したことのない取り組みに暗中模索する日々を送っておりました。また、折しも働き方改革の波が全国の学校に押し寄せてきました。学校改革と働き方改革というふたつの命題を両立させなければならないことへの葛藤も感じながら、両者を少しでも前に進めるべく同僚と議論を交わしたり、教育の専門書だけでなく、慣れない経営学やビジネス、時には哲学の書物もひもといたりしていました。しかし、やはり学校の「ウチ」や書物の世界だけでは学べないことも多く、（いい意味でも悪い意味でも）ガラパゴス化した東京の私学の改革のためには、「ソト」の世界から刺激を受けなければいけないということをおぼろげながら考えはじめ、その手段としてリカレント教育を受ける機会を探していました。

本校の同僚（否、大先輩）森茂達雄先生から、休職することなく現職教員が学べる福井大学連合教職大学院のことを教えていただいたのは、まさしくそんな頃のことでした。森茂先生は東京サテライトの責任者である福島先生と以前からのお知り合いだったとのことですが、「縁」という言葉は、こういうことを表現するためにあるのでしょう。福島先生と森茂先生の「縁」、森茂先生と私の「縁」。それらの「縁」が結びついて生まれた福島先生と私、福井と私の「縁」。この文章を認めていられるのは、まさにそうした「縁」あってのことだと感じています。

ここで「縁」という言葉にこだわる由縁を少しばかり披瀝させてください。そもそも「縁」という言葉を私に教えてくれたのは、私の高校時代の担任の先生たちでした。たち、と書いたのは 1 年次の担任と 2・3 年次の担任のお二人を指しているからなのですが、そのお二人がともに「縁」という言葉を用いてお話をなさっていたのが、強く印象に残っているのです。「縁」あって出会った二人の先生が、それぞれ「縁」という言葉を大切にされている。年齢も性格も異なる大人たちが、「縁」という価値観において共通項を持っている。ただそれだけのことかもしれませんが、高校生だった私には大いに感ずるところがありました。そして、あれから幾星霜。「縁」あって私は二人の先生の同僚（後輩）になりました。私の勤務先は私の母校です。先にも述べたように 2023 年に本校は 100 周年を迎えます。母校 100 周年を母校の教員とし

て迎える「縁」。母校の改革に母校の教員として臨む「縁」。そういった様々の「縁」に導かれてきているからこそ、私は「縁」という言葉にこだわりたいのです。

思えば、今般の新型コロナウイルス感染症による教育の危機もまた、私にとっては「縁」なのかもしれません。本校でもオンライン学習や授業のあり方をはじめ、学校行事、クラブ活動、広報活動など様々な視点で、対応策を講じる必要に迫られていますが、結果として学校のこれからのあり方を同僚とともに考え、語りあう貴重な機会になっています。とある先生は「このピンチをチャンスにしていきたい」と口にしておられましたが、コロナへの対応には、100 周年を迎える本校の未来を考え、語りあう文化の醸成にまでつながる「縁」を見いだせると考えています。

数々の「縁」に導かれてきた〈今〉と誠実に向き合いながら、これらの「縁」の連環をここで断ち切ることなく、「縁」を次の世代、未来の保善生たちにつないでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

## 伊部　雅之　いべ　まさゆき

今年度、学校改革マネジメントコース 1 年生に入りました、福井市安居中学校の伊部雅之（いべ まさゆき）といいます。よろしくお願いします。現在私が勤務する安居中学校は、市街地から少し離れた福井市の西部に位置している学校です。本校は、もともと安居小中学校で一つの校舎に小学生、中学生が一緒になって学校生活を送っていました。9 年前に中学校が分離独立し、福井県で 3 番目の教科センター方式の中学校となりました。また本校が、福井拠点公立校であることもあり、今年度から私が教職大学院で学び、その学びを他の安居中学校の先生方にも伝えることできたらと考えています。

前任校の福井市成和中学校から安居中学校に異動して 3 年目となります。大規模校から小規模校への異動でしたので、いろいろな違いに戸惑うことが多かったように思います。昨年度、2 年生の担任をさせていただき、その中でキャリア教育の一環で職場体験学習を実施しました。その際、福井市教育委員会と協働し、キャリア教育コーディネーターとも連携して、「提案型職場体験学習」という生徒の主体性を高める職場体験学習の形を模索する取組を行いました。職場体験の期日は10月29～31日の3日間でしたが、7 月上旬から職場体験学習の活動を始めました。まずは、今年度協力していただける職場の方に来ていただいて職場説明会を行いました。生徒がただ聞くだけの説明会ではなく、生徒が職場の方に質問し、その内容を模造紙にまとめ、そして生徒が他の人に対してその職場がどんな職場かを発表するという形で行いました。さらに自分が体験を希望する職場へのエントリーシートの作成、職場の方による面接を経て職場の決定、最後に職場への事前見学を行い、当日を迎えました。

このような取組ができたのは、学校の規模がとても動きやすかったことが挙げられます。大きな学校ではどうしても、学年全体で考えなければならないことが多く、生徒ひとりひとりの学びをより大きくすることを意識したカリキュラムを構築することが難しいと考えます。小規模校だからこそ取り組むことができることがたくさんあります。異動当初は、「学校小さいから・・・」と消極的な発想が多かったように思いますが、今では「小さくて動きやすいことを生かして何ができるか？」というように前向きに捉えています。

今年度は担当学年が 3 年生となり、さらには研究主任という立場になりました。コロナの影響で何かと制限がありますが、先ほど述べたように「小さくて動きやすいことを生かして何ができるか？」ということを自分のクラスはもちろん、研究主任という立

場で学校全体にも広げていければと考えています。そのためにも教職大学院で、いろいろな先生方と語り合う中で多くの学びを得て、安居中学校にも還元できればと考えています。これからよろしくお願いします。

## 吉田　清子　よしだ　せいこ

歴史と人類の、記録にも記憶にも刻まれるであろう、2020 年春、福井大学連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました、吉田清子と申します。教職大学院の拠点校である、福井市至民中学校に勤務しており、学校事務職員として勤めております。

職名を言うと、多くの方々から「事務職員が教職大学院に？」という反応が返ってきます。学校改革の要は授業改革であることは自明ですが、その授業をよりよいものへとするためにも、組織体制のあり方、環境整備、リソースの調達といったマネジメントが重要になると考えています。学校のハード面ソフト面の環境整備（財務面・人材面等含めた学習環境）の整備に携わり、マネジメントすること。これは、事務職員の専門分野です。以前から、学校組織マネジメントに関心があり、県外の大学院での講義を受講したり、学会での実践発表会に参加したりしていましたが、やはり、もっと腰を据えてじっくり学びたいと思っていたところ、福井大学連合教職大学院が、2020 年度入学から、教員以外へもその門戸を広げていただけるということで、受験した次第です。

学校教育の抱える課題が複雑・多様化する中、それらに対応しうる高度な専門性と豊かな人間性・社会性を備えた力量ある教職員であらねばならないと、これまで様々な実践を積んできましたが、やはり、個人での取組では限界があり、焦燥感や空虚感も感じるようになっていました。そのような折、教職大学院の拠点校となる至民中学校へ赴任し、実践的指導力の育成に特化した教育内容、事例研究や模擬授業など効果的な教育方法、これらの指導を行うにふさわしい指導体制など、力量ある教職員の養成のためのモデルを制度的に提示する教職大学院の実際に触れることとなりました。この、より実際の学校現場に即した、実践的な講義や実践研究の推進が組み込まれたカリキュラムを目の当たりにし、理論と実践の融合をはかる教職大学院で学びたいと思ったのです。これまで培ってきた経験と専門性を活かしながら、改めて同僚の教員や管理職、大学院の指導者の知見を得ることで、学校づくりの観点からの学校改革マネジメントについて省察し、実践研究したいと考えています。

そもそも学校は、その組織運営について責任を持ち、情報を開示した上で評価される体制であるべきなのはいうまでもありません。その上で、多様化が進み様々な価値観があるなかでも、子どもたちが社会的自立を果たす準備の場として、地域や家庭のニーズに応えられるよう、学校運営の組織とその運営の在り方について不断の改善を図りながら、より機動性あるものにしていくことが重要です。

加えて近年では、国を挙げて、社会全体での働き方改革が喫緊の課題となっており、学校もまた決してその例外ではありません。ただ、人員の大幅な配置増という豊かな財政事情が見込まれない現状では、社会全体と教職員の意識の改革とともに、属人的ではない、制度としての仕組みづくりが肝要となってくると思われます。そのためには、職場文化の変革・学校文化の見直しが求められ、組織開発が必要となるのではないでしょうか。学校改善のための組織文化の変革には、これまでの制度・仕組みへの挑戦が求められると考えています。

そこで必要なことは、学校組織の多様性を活かす学校経営と、多種職で構成される組織体で職種を超えた協働のもと、各々がリーダーシップを発揮することだと捉えています。各総合教育会議の「目標」に民意が反映されているように、「学校教育目標」にも地域住民の【思い】や【願い】も込められるべきであ

り、そのために、現状を把握するという、地域や保護者の目線を持ち、価値観を共有していこうと、それぞれの立場でリードし、実践していくことが大切なのではないでしょうか。

そこで、教職大学院では、学校を取り巻く環境の変化を捉え、未来を見据え、次世代の学校をマネジメントする学校改革を追究すべく、組織開発とリーダーシップについて研究を深めたいと考えています。教員や管理職と共に、教育行政の専門である事務職員も教育課題や学校改革の視点を学ぶことは、マネジメントを担う教育行政職員の役割を学校・教職員へ浸透させ、よりよい学校づくりに貢献することに繋がることになると考えます。学校事務職員をはじめとする、教員以外の様々な職員による、学校マネジメントの在り方や、それぞれの役割、リーダーシップについて明らかにすることで、組織開発がより活性化され、学校改善が推進されると信じています。そして、一日も早く、教員以外の職種が教職大学院で学ぶことが「特殊」でなくなることを願っています。

## 学ぶ意味を問いつづける

### 坂東　由美　ばんどう　ゆみ

はじめまして。本年度連合教職大学院学校改革マネジメントコースに入学しました，坂東由美（ばんどうゆみ）です。附属義務教育学校後期課程に勤務し，可愛くやんちゃな中学生と充実した毎日を過ごしています。

「先生，どうして社会科の先生になろうと思ったの？」教師なら度々尋ねられる質問の一つではないでしょうか。私が社会科教師に憧れをもつようになったのは，中学 1 年生の春，家族旅行で広隆寺の弥勒菩薩を間近に見たときだったと思います。「…本物！」境内の穏やかで優しい光に包まれた仏像の美しさと，桜の美しさは今でも鮮やかに蘇ってきます。それからは社会科資料集を隅々まで眺めたり，解説を読んだりすることが大好きになりました。広隆寺を参拝したのですから弥勒菩薩に出会うのは当然なのですが，当時の私にとっては大変な衝撃だったのです。「歴史って昔のことを知るだけじゃない。今に続いていることも知ることができるんだ」と考えるようになりました。

しかし，当時の社会科の授業はもちろん一斉授業。先生の話を聞いて板書を写して…暗記。といったスタイルでした。そんな，授業スタイルしか知らなかった私でしたが，これまで子どもと共に創り出す授業を模索してきました。そんな私が，附属義務教育学校に赴任し，全く新しい授業を目の当たりにさせられました。附属に赴任した 1 年目は，研究会などで飛び交う附属用語についていくことで精一杯でした。生徒も授業中，活発に自由に意見を述べ合い，生き生きとしています。これまでの自分の授業観を大きく覆されました。教室での子どもの学びのみならず，学校のすべての活動が教師にとっても探究（研究）の一環であり，教師集団にも探究コミュニティが形成されていることを実感する毎日です。放課後や授業の合間の休み時間にも，授業の展開をどうするかなど，自然発生的に語り合う繋がりがあり，これが同僚性というものなのだろうかと感じずにはいられません。

「主体的対話的で深い学び」とは子ども達だけに求めるものではなく，実践者である自分自身のなかで沸き起こる学びが必要であると感じます。また，コロナ禍を経験し，変化し続ける社会に共に生きる市民として，学びは子どもだけのものではなく「学び続ける教師」であることは今や当然と考えなくてはいけないと痛感しています。

世界は加速的に拡大膨張し，人々の価値観も更に多様化する，まさに VUCA 時代に直面しています。このような社会においては，だれもが先例のない複雑な問題に対処する力が求められます。出来合の問いと答えを覚えることを中心とした学びでは，それらは培われません。学び手である子どもと同様に，授

業者も子ども達と共に学びを創り上げ，主題が解明されたときに更に新たな課題を見いだすことが，教師としての実践力を繰り上げていくことになるのであると考えるようになりました。

教職大学院で 1 年間学ぶに当たり，予測困難な社会に対応する力を培う教育に留まらず，変革を起こし，新たな価値を創造する子ども達を育てる学教教育と新しい教師の姿，そして就学前から義務教育を終えるまで連続した子どもへの支援の在り方を具体的に考えていこうと思っています。

## 林　雅則　はやし　まさのり

今年 4 月から、学校改革マネジメントコースで皆さんと一緒に学んでいます　林雅則と申します。よろしくお願いします。私は教師経験がありません。行政事務職として 40 年余、地方公務員を務めてきました。その間、教育委員会で 10 年、県立大学で 6 年と教育関係の仕事をしました。元々、学生時代に家庭教師や塾の講師を経験する中で、人に教えることの難しさを実感し、教職課程を取りませんでした。こんな私がはからずも、公務員人生の終わり 7 年間に、初等中等教育に関する教育行政、高等教育としての大学運営に携わることとなり、改めて教育の難しさと重い責任を痛感しました。教育は、今を考えるだけではなく、時の動きを捉えながら、明日を未来を見通して、次の世代を生きる、それぞれ違う、一人ひとりの人間としての子どもたち、若者たちの成長を支える役割を果たしていかなければならないからです。ここ数年、教育に携わりながら、特に考えていたことは、地域（福井）の持続可能性です。グローバリズムや都市化の進展により、あらゆる機能や人が都市に集中し過ぎ、地方は衰退しつつあります。それぞれの地域にある豊かな資源、特に人的資源を生かし、これまで培ってきた地域の活力を継承しなければなりません。人が地域を創り、未来を拓くのですから…。このため、少子化に向かう時代ですが、地方だからこそ学生定員を増やし、挑戦したいと思うような選択肢を増やすため、地域のこれからを考える学術分野を広げる取り組みを始めました。若者の県外流出を抑制するだけでなく、国内外から多くの若者が集い、福井のようにウェルビーイングに結びつく教育力や産業力を有する地域をフィールドに過ごしてほしいと思っていました。たくさんの子供たちや若者が集う地域には新たな活力が生まれ、地域の持続可能性が期待できるのではないだろうか、そんな思いから、県立大学で、Local Sustainability with SDG’s を理念とした新たな学部の創設を準備してきました。福井大学の教育学部や国際地域学部との協力も欠かせません。残念ながら、その道半ばで後進に道を譲るため、昨年の夏に役職を退きました。私は今月（7 月）で 67 歳です。もう余生を過ごす年代と言われるかもしれませんが、内館牧子さんの『終わった人』にはまだなりたくありません。人生 100 年時代は始まっています。そんな時、五木寛之さんの『林住期』という本に出会いました。古代インドには人生を「学生期」「家住期」「林住期」「遊行期」の 4 つに区分する「四住期」という思想があります。一通りの仕事を終えた時期が「林住期」です。でも、私はまだ「林」の中に住むのではなく、「里」（人里か山里か）に住んでいたいと思っています。「里住期」としての「第 2 のミニ学生期（がくしょうき）」も良いのではないかと考えています。（周りの人にはご迷惑かもしれませんが…）今一度、地域の未来の人づくりのため、教育のあるべき姿について勉強してみたい。そんなことを考えていた折、昨年末に連合教職大学院の入試案内を拝見しました。教員免許も持たない、この年齢の私では無理だろうと思いつつ、連合教職大学院の先生にご相談したところ、教員免許のない人にも門戸を広げたので、受験してみてはどうかとのうれしいお話をいただき、何の準備もないままチャレンジすることにしたのです。受験説明会では、中学校の体育の先生、商業高校の商業科の先生、幼稚園の副園

長先生、学校事務の方、フィリピンで教育行政に携わっている方など様々な立場の皆さんが意欲的に学ぼうとしている姿を目の当たりにしました。こんな人たちと共に、教育のことを学べるのなら、その仲間に加わらせとほしいとの希望が膨らみました。さすがにこの年齢での入学試験は思うままにならず、不安いっぱいでしたが、なんとか入学を認めていただけました。残念ながら、コロナウィルス感染が拡大する中での入学となり、教職大学院で学ぶ皆さんとは直接顔を合わせる機会がなく、また、もっとも希望していた学校現場での実習という機会はこれまでのところ実現していません。しかし、皆さんとのオンラインでの交流を通じて、こうした苦境の時でなければ経験できないようなご苦労も一緒に体験できています。教師の皆さん、多くの子どもたち、すべての学校の応援団として少しでも頑張れるように、これから皆さんと一緒に学んでいきたいと考えています。お付き合いをよろしくお願いします。あわせて、連合教職大学院の先生方には、ご指導の程よろしくお願いいたします。

## William Tjipto ウイリアム　ティップトー

Hello. My name is William Tjipto, but everyone just calls me William or Will. I was born and raised in California, America. My parents are from China, so I spoke Mandarin Chinese at home. Being raised bilingual made me interested in languages from an early age, so I also learned a little Spanish, Swedish, and Japanese in high school and university, finally graduating with a Bachelor's in English. My goal of obtaining an English degree was to eventually teach the language.

I was lucky to live in Los Angeles where there is a thriving Japanese *nikkei* culture around Little Tokyo and other communities. Over the years, I developed a strong interest in Japan through making Japanese friends, experiencing culture, reading about history, watching modern media, and, of course, consuming delicious food. In 2014, I accepted a position on the JET (Japan Exchange and Teaching) Programme as an Assistant Language Teacher (ALT) with the intent on staying only one year because I wanted to return back to America to continue my teaching career.

The JET Programme sent me to Fukui Prefecture. Even though I had visited Japan three times prior and visited two dozen prefectures, I had not known much about Fukui other than the dinosaur museum. It was to my surprise that I found myself very happily living and working here, more so than I could ever have imagined. Obama City was much more beautiful than any other place I have seen and it has given me a sense of nostalgia for the simpler, but no less wonderful, life.

This is now my sixth year working at Obama Daini Junior High School, more commonly referred to as "Obama Nichu." I have been lucky to work with 12 JTEs (Japanese Teachers of English) teachers during that time, gaining a lot of skills and knowledge working and teaching in Japan from them. Moreover, I have had many chances to visit and teach at several elementary schools, attend student seminars at high schools all over Fukui, and volunteer teach at dozens of other events.

In order to further my education while I was working, I also obtained a TEFL (Teaching English as a Foreign Language) Certification. I also started to look into a master's program in Japan as well as online options from America and England very recently. As fate would have it, I luckily heard from Wang-sensei during an ALT ceremony meeting last summer when she told us about the Master's in Education program at Fukui University that was newly open to ALTs.

What drew me to this program was the potential to have it concurrently happen while working at Obama Nichu with the permission of my school. Such a program would further deepen my understanding and experience teaching in Japan, especially here in Fukui. Now that I have developed a desire to stay in the future, I knew that this would potentially be the best possible opportunity for me.

I know English is not an easy subject to learn. Being a second-generation in America, I saw both the Chinese and American sides of learning languages, so I can understand the difficulties of following seemingly strange grammar rules. My goal is to make students be able to learn English at all levels proficiently and naturally.

To do that, my current goal of inquiry is to improve inherent motivation in my students as well as sharpen my skills in curriculum development. I want to make a wide range of engaging lesson plans that are interesting, unique, and relevant to students of any age, ability level, and interests. I know that there are many potential methods to improve education, so I want to continue studying, learning, as well as helping others expand their own knowledge.

While I am still early in my program at Fukui University, I am already learning so much thanks to the experiences, discussions, and assistance I am receiving from fellow teachers and professors. I look forward to furthering and sharing our practice in these upcoming years.
よろしくお願いします！

## 野口　大輔　のぐち　だいすけ

学校改革マネジメントコースに入学しました、武生商業高校の野口大輔と申します。教科は、商業を担当し（財務会計・ビジネス経済・情報処理など）、2 年生情報ビジネス科（男子 8 名、女子 25 名）の担任をしています。また、部活動では野球部の顧問（選手 20 名、マネージャー5 名）をしております。

昨年、校長先生との雑談の中で、教職大学院について教えていただきました。本校に赴任し 14 年目を迎えるということで、自分の中で少し慣れというか、次なる目標を見いだしにくい状況であるのを察していただいたのか、本当によいタイミングで紹介いただけたと思っています。

大学では、商学部で学んでいたため、教職課程は履修していたものの、教育について深く学ぶ機会が、少ないと感じていました。また、マネジメントという言葉に興味があり、学校の組織をよりよいものにしていくためにということを、少しずつ考えていきたいと思っていたタイミングでもありました。

時代の流れも非常に早く、教育界も変わらないといけないターニングポイントを迎えていると思います。その中で、教員もその変化に対応していかなくてはいけないと痛感しています。4 月から、Zoom を使った遠隔での講座が続いていますが、多くの経験をお持ちの先生方と交流できたことを本当にありがたく感じています。高校という 1 つの校種しか経験したことのない自分にとっては、毎回気づきと発見の連続で、この教職大学院での学びを、現場で活かしていきたいと思います。

2 年間、よろしくお願い致します。

## インターンシップ／金曜カンファレンス報告

# 日々の学びから生徒と向き合うために

授業実践・教職専門性開発コース2年/（福井市至民中学校）　黒田　苑

6 月に学校が再開され、今年度の至民中学校でのインターンシップが始まりました。コロナ禍で感染予防をしながら、生徒と関わっていかなければなりませんが、この 2 カ月を通して、生徒が友達と一緒に学ぶことができることの大切さを感じています。

M2 になって、今年度は 1 学年に所属し、複数のクラスを回って学ぶ機会を頂きました。多くの生徒たちと関わる機会を作る目的があります。しかし、裏を返せば、学級という場所に私の確かな居場所はありません。自分から積極的に関わっていかなければ、生徒とコミュニケーションができません。生徒玄関での登下校での少しの関わりではありますが、自分から関わりに動いた今年度と、そうでない昨年度では生徒との関係性も違っていると実感しています。その昨年度の反省から、「私自身が生徒からどのように見えるのか」「今の私に足りないものは何か」などを考えながら、今年度の残りのインターンシップの学びに生かして挑戦しています。

今年度、長期実践報告の研究主題と合わせて、「国語科の授業でどのように生徒の個性を生きたものにできるのか」という問いを立てようと考えました。ただ、「生徒の個性」といっても、授業で学ぶ姿や課題に対する見方・考え方など、授業のなかで垣間見える場面はそれぞれであると思います。恥ずかしながら、私自身は「学習課題に対しての問いを立て、技能を身に付けていく」ような見方しかできていませんでした。実際に授業実践の機会を頂いた時も、生徒の反応を見て「私の問いかけはどうしてこんなに生徒をつまらなくさせてしまうものなのだろうか」と悩みました。そこで、これまで学級を見るために参観していた他教科の授業からも、今年度は学習内容と生徒の自己関連性に着目して、先生方がどのように生徒に興味を持たせるような働きかけをしているのかを学ぼうと思いました。

そして、この 2 カ月で先生方から学び始めたことを、これからの授業実践に生かしていきたいと思います。国語科という教科で「生徒と学習内容のつながりは何か」「どのように考えて学びに向かうのか」を検討し、生徒の学びがどんなものであったかを省察をしていきたいです。

最後に、昨今はコロナの第２波によって感染者が増え、再び休校になることも想定しながらインターンシップをすることになりました。学びの形が変わってしまった時に「自分は何ができるのか」を考え、来年度の積み重ねにしていこうと思います。

# ミドルリーダー／マネジメントコースだより

## 関わり合うことで、自分の認識以上のものに出会える
### ～教師と生徒の成長～

ミドルリーダー養成コース2年/板橋区立上板橋第二中学校　大野　豪

福井大学教職大学院での 2 年目がスタートしました。1 年前の自分を思い起こしてみると、カンファレンスやラウンドテーブルで難しい言葉ばかりが飛び交い、何を話していいのかも分からず、ただただ緊張しながらその場に座っていたことを思い出しました。それは教師生活 11 年間、研修から逃げてきた自分自身が「教師として何を大切にしたいのか？何を拠り所にしていきたいのか？」をじっくりと省察することなく、日々の生活に追われ自分を語ることが出来なかったからだと思います。1 年前、福井大学教職大学院で学ばせて頂くことを決意したのは、「そのような自分を変えたい」「これから先、自信をもってこの仕事をしたい」と思ったからでした。

あれから 1 年が経ち、校種や地域を問わず様々な方々に出会い、多様な考えに触れることで、たくさんの自分の認識以上の考えに出会えました。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたことや語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探る中で、自分が大切にしてきた教育観（内なる理論）を少しずつ明確にすることができました。今年度のカンファレンスでは、その内なる理論を元に、以前よりも自信をもって語れるようになってきた自分の変容にも気づくことができました。また、昨年度からチャレンジしている「協働による校内研修会の活性化」、「探究学習」、「自分の認識以上のものを大切にした授業」で、生徒と教師の成長が日々感じられるようになってきました。

本校は、令和 4 年 4 月に新校舎が完成し、移転とともに「教科センター方式」での学びがスタートします。教科教室の特性を活かし、上板橋第二中学校の共有ビジョンである「関わり合うことで、自らの学びを深める生徒の育成」を目指していきます。そのために、福井で学んだことを勤務校に還元し、教職員全員で授業革新に取り組んでいます。また、今年度は、新たに校内研修会を 6 グループに分け、1 グループ 4 名の異学年、異教科で構成し、グループごとにテーマを決めてお互いの授業を参観します。各グループにコアメンバーが入り、方向性を確認していきます。授業を見る視点は、「生徒の学びの姿」に置き、必ず参観する生徒を決め、その時間の生徒の変容について話し合います。生徒の学ぶ姿で、話し合いをすることで我々教師同士の考えが一致できるようになりました。そして、もう 1 つのチャレンジは、探究学習を「SDGｓを軸とした 3 年間のプロジェクトにすること」です。これについては、上板橋第二中学校の伝統となるまで 3 年かかりますが、今年度はその基盤をしっかりと作り上げたいと思います。

最後にコロナウイルスの状況下で、学びの機会を失うことなく、準備に携わって頂いた先生方に深く感謝致します。今後ともよろしくお願いいたします。

## すべての子どものために

学校改革マネジメントコース2年/福井県教育総合研究所　坪川　美穂

高校勤務から福井県教育総合研究所の教育相談センター勤務となり、4 年目を迎えました。今年度は新型コロナウイルス感染拡大によって４月、５月が休校であったためだと思われますが、年度当初の相談件数は例年と比べて非常に少なかったです。しかし 6 月から学校再開となり、現在、相談件数はかなり増え

てきています。夏休み以上に長い休学期間の影響は、集団規律、友だちとのかかわり、学習や体力面等、思った以上にあるのではないかと言われています。そのような状況の中、学校では、これまで以上に教師と子ども、また、子どもどうしの人間関係づくりを仕掛けていくことが必要になっていると思われます。

教育相談センターでは、平成 28 年度より県内の小中学校に「福井県版学級経営プログラム」として「学校サポートプログラム」を提供してきました。昨年度は、プログラムを普及させる手立てを構築することを目的とし、「指導案とプレゼンテーション資料とワークシートがあれば、所員が入らなくてもプログラムの授業実施が可能である」という仮説のもと、研究協力校において実践研究を行いました。今年度からは、これまで提供してきたソーシャルスキル教育を柱としたプログラムとピア・サポート活動を柱としたプログラムにレジリエンス教育を柱としたプログラムを加えた「福井県版ポジティブ教育プログラム」を、希望する地域・校区に対して提供しています。このプログラムは、児童生徒に「幸福を自ら創り出していく力」を学校教育において育てることで、「持続可能な幸福を育む学校づくり」を目指すとともに、児童生徒の自己有用感や集団への適応感を高めることを目的としています。育てたい子ども像について地域全体あるいは校区全体が共通認識をもち、実情に応じて 3 つのプログラムから活動を選択して実施するものです。

「福井県版ポジティブ教育プログラム」の実施は、すべての子どもを対象とする一次的支援と一部の子どもを対象とする二次的支援にあたり、このプログラムを地道に進めることによって、三次的支援を必要とする子どもの減少が期待されます。しかし、それでも特別な重大な援助ニーズをもつ特定の子どもがゼロになることはありません。それらの子どもたちが抱える複雑で多様な課題をより効果的に解決していくためには、従来の教員集団による同僚性にもとづくチームよりも、教員と専門スタッフから成るチームで支援を行うことが求められています。今年度、全日制の県立高校にスクールカウンセラー（SC）が初めて配置されました。チーム支援をうまく機能させるには、それぞれの役割を明確化し、勤務時間の少ない専門スタッフを機能的に活用する必要があり、そのためには組織的な支援体制の構築が不可欠だと言えます。今年度はチーム支援についての研究の主担当となったので、県立高校における SC を含めた教育相談体制づくりに重点を置いて実践研究をすすめていく予定です。

コロナ禍の中どこまで実践研究をすすめられるか分かりませんが、学校が各学校の状況に応じて、3 つの支援のバランスを考えながら同時進行での支援実施をマネジメントしていけるよう、「すべての子どものために」を合言葉に、学校に寄り添った支援を行っていきたいと思います。合同カンファレンスやラウンドテーブル、集中講座等で皆さまからいろいろご意見をいただけますよう、よろしくお願いします。

# 日頃の実践を振り返って

学校改革マネジメントコース 2 年/福井市森田中学校　青木　喜一郎

コロナによる臨時休校措置があけて約 1 ヶ月が経とうとしています。

約 3 ヶ月間で今までとは違う生活リズムに慣れてしまっていたところでの学校再開。最近、生徒も私たち教員も正直疲れが見え始めてきました。コロナに振り回されないようにしたいものです。

さて、今年度も持ち上がりで第 3 学年主任を任されることになりました。振り返ってみると、生徒たちは 2 年前とは比べものにならないほど成長してくれました。これは、昨年度、教職大学院に入学して PDCA と共有意識の大切を知り、それを様々な学年活動に

組み込む努力をしてきたからであろうと思っています。

学年の教師たちで様々な活動プランを立ててきたことを通して、自分が思っていた以上に教師間の思いが異なっていたことに気付くことができました。各教師が自分の思いを伝え合い、お互いに理解していくことで教師間の協働性も高まる。その教師たちの仲の良い姿を生徒たちも見て、学年の良い雰囲気を感じ取ってくれていたのだろうと思います。

各行事の終了後には、学年の教師たちで省察を繰り返してきました。そして、教師だけではなく生徒たちにもこの活動をさせて、学年全体に広げていきました。1 年間かけて、慌てず、じっくりと生徒とともに成長していくことを我々教師が楽しみにしていたことが良かったのだろうと考えています。

そして、教職大学院 2 年目である今年度は受験を迎えます。1 年間かけて成長してきたことを土台として、受験だけにとらわれず、夢を抱いて自主的に取り組む生徒を育成したいと考えています。「夢をもつ生徒」については、本校でも福井県全体でも数値が低いといわれています。その理由は、「夢をもつ」という漠然としたつかみ所の無い言葉だからであろうと思いますが、逆にこの課題に受験期に取り組むには最適だと考えています。夢をもつために必要となる「人間の条件」を教師たちで考え共有する。その条件を生徒に伝え、成長過程をじっくり見とりながら支援していく。このような「流れ」を柱にして生徒に学習に取り組ませる。今年度は「夢をもつこと」と「学習」の両輪で学年を経営していきたいと考えています。

何事も「さあ、今からみんなで考えますよ」というのでは「時、既に遅し」です。日頃から管理職の先生、学年の先生、生徒たちと課題や目標等の話をしながら共有し、記録し、行動に移していく。そういう風通しの良い学校文化が大切だと考えています。

# 3 カ月を振り返って

**学校改革マネジメントコース 2 年/福井市明倫中学校　前田　朋子**

3 月からの臨時休校中、いろんな学びがあった。

一つは、Zoom である。4 月のカンファレンス準備会が、初めてであった。これまでは ICT 関係は苦手だから･･･と逃げていた自分であった。しかし Zoom をしなければカンファレンスも受けられない。自分ができるのかとても不安であったが、教職大学院の先生の準備資料や丁寧な説明のおかげで、無事に準備会を終えることができた。Zoom の不安はなくなり、私にもできたという自信にもなった。5 月のカンファレンス、6 月のラウンドテーブル、7 月のカンファレンス、そして他の学習会にも Zoom で参加することができた。おかげで、普段は東京まで行かないとなかなか聞くことができない先生の講義等も聞くことができ、研究主任として授業づくりや校内研究について貴重な学びになった。

学年主任としての気づきもあった。学年スタッフの先生方の考えや、その先生のよさを感じている。先日の学年集会では二人の先生が話をされた。一人の先生は学年学習担当者として、テスト勉強の意義についての話であった。教師が説明してしまうのではなく、生徒に一つ一つ問いかけ、生徒からテスト勉強の意義や学校で仲間と一緒に勉強するよさを引き出した。もう一人の先生は、学年生活指導担当者として、2 年生の学校生活の様子の問題点について考えさせ、生徒の心に響く話であった。話の最後は「学年目標『でっかい太陽』を目指そう」と熱く訴え、私の思いをしっかり生徒に伝えていた。その日の学級長会に参加すると、学級長担当の先生は、生徒の意見に耳を傾け、生徒自身の企画を大事にしていた。教育相談では、生徒に寄り添い、一人一人の悩みをじっくり聞いていた先生もいた。また、副担の先生 4 人は一緒に、学年掲示板の掲示物を作成している。毎月季節感のある掲示物である。カンファレンスやラウンドテーブルを通して、4 月当初は、自分は学年主任なんだから、責任をもって取り組まなければという思いが強かったのではないかと気づくことができた。今は学

年の先生たちと一緒に生徒を育てていきたい、そして学年主任として先生方のよさが活きる学年経営をしたいと考えている。

また、学年スタッフは、若手、中堅、ベテランがいる13名である。ベテラン教員は、部活動や生徒指導、教育相談において、若手教員にとって学ぶことが多いだろう。ベテラン教員は、若手から ICT などを学ぶことができるだろう。それぞれの世代がお互いに学び、成長していける学年でありたいと思う。

2 学年生徒の学年目標は「でっかい太陽」である。それには「目標に向かって、粘り強く取り組む。最後まであきらめない。」「自分の（自分達の）課題に対して、自分達は何ができるか自分達で考え、実行する。振り返って、失敗を次に活かす。」「周囲の人への思いやりや感謝の気持ちをもつ。」という、願いが込められている。生徒だけでなく、自分自身も、そして我々教員も「でっかい太陽」の姿でありたいと思う。

# 学校改革マネジメントコース2年目にあたり

学校改革マネジメントコースM2/敦賀市立粟野小学校　向山　博昭

昨年 4 月、「教職大学院で何を学べばいいのだろう」「教職大学院での学びを学校に生かせるのだろうか」など、さまざまな迷いの中で私の教職大学院での学びがスタートした。

教師となり 29 年目にして、初めて教師としての自分の歩みを振り返る機会を得た。これまで、さまざまな子どもたちや先輩、同僚と出会い、学び、いろいろな経験を積み、今の自分があることをしみじみと感じている。

これまでの自分の歩みを振り返り、問い直したとき、さまざまな人や経験がつながっていることに改めて気づいた。出会った先輩、同僚からは教育観や仕事に対する姿勢、子どもと向き合う情熱、学級経営や授業づくりを、保護者や地域の方からは学校に対する見方や考え方を、そして、子どもたちとの関わりの中で多くのことを学んできた。これらの経験や知識などがつながり、現在の自分がある。教職大学院での学びを通して、学校現場においても、教員同士をつなぐこと、子どもたちや家庭・地域とつながることをさらに意識するようになった。

教職大学院のカンファレンスでは、毎回グループセッションが行われる。自分の実践を語り、グループの先生方の実践を聴き、大学院の先生やグループの先生方からこれまで多くのアドバイスをいただいた。教職大学院に入学してよかったと思うことは、地域や校種を問わずさまざまな方々に出会い、多様な考えに触れることができていることである。また、以前同じ職場で一緒に働いていた先生や高校時代にお世話になった先輩と縁あって再びここで出会えたことも、自分にとっては大きなことである。今年度も、いろいろな場面での出会いを大切にしていきたいと考えている。

今年 4 月、松原小学校から粟野小学校に新任教頭として異動となった。粟野小学校は、児童数 571 名、教職員数 41 名、嶺南地域最大規模の小学校である。責任の重さをひしひしと感じながら、これまで経験したことのない未曾有の事態への対応に、試行錯誤する日々が続いている。

現任校は、6 月 1 日から学校を再開した。学校再開にあたり、臨時休業開けの児童の様子が心配されたが、子どもたちは徐々に学校生活に慣れ、落ち着いて学習に取り組んでいる。今後は、新型コロナウイルスと共存する新しい生活様式やさまざまな制約の中で、いかに子どもたちに豊かな学びを提供していくか、自校の教職員と知恵を出し合い、議論をしながら実践に繋げていきたいと考えている。

また、現任校には、20 歳代の教員が 11 名いる。若手教員の授業力の向上やスクールプランへの参画意識の高揚など、若手教員の育成が現任校の課題の一つである。そのために、各教室に足を運び、授業や子

どもたちと接する様子を観察し、気づいた点について情報交換をするように努めている。今後、若手教員を育成するシステムの構築やコミュニティの形成など、次の一手を投じていきたい。

とはいうものの、学校が変わり、立場が変わり、日々の業務に追われ、新たな取組を進めることが難しいのが現状である。その時間をいかにして生み出していくかが、現在の私の課題である。

# 6 月ラウンドテーブルをふり返って

## ラウンドテーブルでのつながり

学校改革マネジメントコース2年/福井県立丸岡高等学校　西岡　晃未

4 回目の参加になった今回のラウンドテーブルは、今までにない経験をさせていただきました。年度当初は、コロナウイルス感染拡大防止対策のため、ラウンドテーブルは実施されないかもしれないと思っていましたし、実施の案内が届いたときにも、遠隔システムでの参加に、不安でしかありませんでした。ですが、遠隔での取組だったからこそ、当日の 6 月 20 日までに何回もプレセッションやミーティングをして、つながることができたのだと思います。

私は、Zone E 「学びと教えのニューノーマルを協働探究する」に参加しました。まず最初に、この Zone E は、園児・児童・生徒たちと共に作り上げていく仕組みだということに驚きました。ポスター発表をしている児童生徒は見たことがありますが、一緒に進めていくことがとても新鮮でした。そして、プレセッションを重ねていく度に、20 日のワークショップがどんどん形になっていくことを目の当たりにできて、本当にワクワクしました。正直に申しますと、毎週火曜日放課後、学校の別室に籠ってプレセッションに参加するのは大変な面もありました。途中で呼び出しがかかったり、ネット環境の面で思うように接続できなかったり…。そのような時でも、少しの時間でもなんとか参加したいと思えたのは、多くの方々と一緒に考えているという一体感と、学びが深まっていることを実感できる楽しさがあったからだと思います。

また、毎回参加者が増えていき、特に子どもたちの参加が多くなっていったことにも驚きました。大勢の中でも自分の意見を臆せずに発言できる生徒、自分たちだけではなく、中学生や小学生の立場を踏まえて考えられる高校生など、大人顔負けの生徒が多く、毎回いろいろと考えさせられました。そうするうちに、私自身、本校の生徒にも参加させたいという気持ちも芽生えていました。従来ですと、このような機会があったとしても、本校生徒は気後れしてしまうに違いないと、積極的に参加を促すことはなかったように思います。しかし、参加生徒がとても生き生きと輝いている様子をみて、本校生徒にもこの雰囲気を味わってもらいたいと思うようになったのです。初めは、私が参加している様子を見ているだけでしたが、それぞれ個人で入れるようになり、最終的に 8 名が参加することができました。各ブレイクアウトルームで、どのような態度で取り組めたかは心配でしたが、次の日に聞いていた感想から想像すると、よい刺激をいただいていたに違いありません。

今回 Zone E に参加し、生徒たちの「本音」を聴くことができて、学校のあり方、学びのあり方について、改めて考え直すことができました。この休校期間中に、生徒たちはどのようなことを考え、どのように過ごしてきたのかについて、たくさん知ることもできました。印象に残っている言葉は「雑談をなくさないでほしい」という発言と「課題はプレゼント」というものです。オンラインで送った授業や与えた課題は、教員目線で考えられたものにすぎなかったのかもしれません。授業時間数や指導内容を気にするばかりで、主役である生徒目線で考えていなかったことに気付かされました。

2日目は、教職大学院の血原先生をはじめ、計6名のグループで実践を発表しました。学校全体の取組の紹介のようになってしまった部分もありますが、義務制の先生方や市役所の職員、大学生というそれぞれの立場でアドバイスをいただきました。組織をどのように動かすか、リーダーシップとは何か、といった内容や、子どもたちの推進力を促すための教師の仕掛けについて、話し合いました。どのご意見もすぐに実践につながるものだったので、時間を忘れて話し続けていて、ブレイクアウトルームから全体に引き戻されるタイミングは、後ろ髪を引かれる思いでした。

今回のラウンドテーブルにおいて、遠隔システムでつながることで、全国の先生方と悩みや戸惑いを共有することができ、そして先生方や児童生徒たちの明日へのパワーを感じることができました。このラウンドテーブルで見つけた課題や目標を、ワクワクしながら取り組むことを忘れずに、今後の実践につなげていきたいと思います。ありがとうございました。

# 「何のために学ぶ」のか、それは、「幸せに生きるため」

学校改革マネジメントコース2年/福井市中藤小学校　伊達　薫里

コロナ禍が教えてくれた事、それは、「普通の日常こそが、いかに大切で、幸せなものであるか」ということ。これに尽きると思います。自然災害が続発し、災害は忘れた頃にやってくるのではなく、忘れない様にやってくる、そんな時代になりました。人は、どう生きるべきなのか、「新しい生活様式」という名のもとに、その答えを一人一人がしっかりと「考えて生きる」ことが求められていると思います。私も、スティホームを強いられたために、今までで一番、大切に、家族時間を過ごすことができました。いっしょにご飯を食べ、心から「美味しいね」と言い合えることが、いかに幸せであるかを感じる、そんな時間を過ごすことができました。いろいろな意味で、「感謝」の気持ちを再確認する、そんな時間を過ごしてきました。昨日、今年大学進学により大阪に行った息子から、「安否確認を兼ねて」と言って、電話がかかってきました。「息子から」電話か…、と感慨もひとしおでした。LINEの既読スルーを淋しく、不安に感じる時もありました。今は、互いに健康で過ごせていることを、心からただ幸せに感じる時間をもつことができました。

子どもたちは、これからの人生を幸せに生きるために、その練習をするために、学校に通うべきだと思います。だからこそ、「学ぶこと」と「働くこと」と「生きること」が、彼らの中でしっかり繋がっていく様に、教育活動をマネジメントしてきたいと思います。「何のために学ぶの？」、それは「幸せに生きるため」、「自分っていいな」って自分を認めてあげながら、「自分なりに輝いて生きる道を探すために学ぶのだ」ということを、伝え続けていきたいと思います。そして、「誰かのために、何かができた自分って、いいな」と感じる共生の感覚こそ、大切に育んでいきたいと思います。

しかし、学びに参加できない子がいます。「わからない」「できない」と感じた瞬間に、学ぶこと自体を放棄してしまう子がいます。「学ぶことこそが、楽しい」と感じさせてあげたいと、今、懸命に子どもたちと対峙している自分がいます。

コロナ禍において、一方通行のHPでの情報発信でしたが、子どもたちに「学ぶことの楽しさ」を味わって欲しいという願いのもとに、ミッションクリア型の課題提示という方法を採りました。初めは、知識確認型、知識獲得型の課題提示によって、学校再開後、できるだけスムーズに学習が進む様にと、子どもたちの自宅での課題を考えていました。でも、これは何か違うのではないかと考え始め、学校再会後に「より生きる学び」を、ゆったりと時間が取れる自宅での学習においてだからこそ具現できないものかと考えました。

例えば、理科では「お天気マスターへの第一歩！」と題し、雲の形を 1 週間観察し、自主学習ノートに記録することで、雲の様子から、今後の天気を予想できることに気づかせました。社会科では、「台所にある食材は、どこから来たの？調査せよ！」と題し、各都道府県の気候や地形に合わせた食料生産に繋ぐ先行知識として、特産品への興味を促しました。英語では、「なりたい職業を紹介せよ！」と題し、“I want to be a 職業.”や“I want to study 教科.”の表現を使い、なりたい職業やそのために一生懸命勉強したい教科を家族に伝えよう！としました。さらに、総合的な学習では、「今、地球を危うくしている「環境問題」を新聞やニュースから 2 つ以上見つけよう！詳しく調べて、自主学習ノートにまとめよう」としました。家庭科では、調理実習ができないことに鑑み、「お家で調理実習！、教科書を見ながら、茹で卵と味噌汁作りに挑戦！」としました。家庭の協力も仰ぎながら、新しく始まる学習への意欲が湧く様に、仕組み、仕掛けを考えたのです。課題を一覧表にして、ミッションをクリアーしたら、チェックを入れる様にしました。全てクリアーした人は、ご褒美シールをゲットできるシステムにしてみました。より、多くの児童が、課題解決への意欲をもち、能動化して学習に取り組んでくれた様子は、学校再会後に提出された自主学習ノートへの記述や、課題一覧表に現れていました。

もちろん課題もありました。それは、家庭の ICT 環境の整備状況や家族の学習への支援状況によって、その成果には、著しく個人差があったことは否めません。今は、その学習成果をみんなで共有しながら学習を進めることで、頑張って取り組めた児童の自己肯定感を高めることができる様、意を尽くしています。

この様なコロナ禍における取り組みを語ることで、その有効性や課題、今後の方向性を明確にすることができる、そんなラウンドテーブルとなりました。また、様々な実践に触れることで、追試してみたい事柄を見つけることができました。基本、相手の実践を、共感をもって聴き合う場の大切さを改めて感じています。自分を語り、それを受け止めてくださる人がいるという環境こそ、自己肯定感を高めゆくことができる、対話の場をもつ意義を、実感できる時間となりました。共に語り合ってくださった皆様、場を設定してくださった方々、本当にありがとうございました。

# ラウンドテーブルに参加して

**学校改革マネジメントコース 2 年/福井県立若狭高等学校　兼松 かおり**

コロナ禍。この世界的な危機に教育が果たす役割とは何だろう。ネット上で様々な授業がすでに配信されている中で、学校だからこそできる教育とは？教師の役割とは？オンラインでもオンラインでなくとも我々教師は授業でどのような力を生徒につけることを目標とすべきなのか？と、この 3 月からの休校時期に考えていた。またそれを話題提供できる機会を５月カンファレンスでいただいた。

そのため、一日目、Zone E「学びと教えのニューノーマルを協働探究する」に参加した。Zone Eはそれ以前から生徒や教師、専門家など様々な立場の方で話し合いを重ねながら、まさに「学びと教えのニューノーマルを協働探究」するという形式だった。当日もこれから自分が学びや教えで大事だと思うことについて、中学生や高校生、教師や大学の先生が一緒なチームで話し合った。そこで一番心に残ったことは、本当に生徒は授業について、行事について、宿題について、評価について、先生について、学校について、教師と共に話し合いたいと思っている。教師との距離を縮めたいと思っていることだ。

「教える教えられるパートナーで語り合えるには、語り合いたい本音を。子供が授業をやるとか。」

「先生と生徒が同じ土俵で議論をするのが楽しい。」

「評価についても、生徒と教師でコミュニケーションをとれるといい。」

「先生は人生の先輩でもあるし、いろいろなアドバイスをもらいたい。」

「打ち解けていないから本音で語り合いたい。どうしたら壁が越えられるかな。」

「学びと教えのニューノーマル」のために生徒たちは、生徒と教師の間にある「壁」を越えたい、と思っているのだ。話し合いはこうも続いた。

「壁を超えるには、生徒も臆せず教師になんでも話しかけたらどうだろうか。」

「いや、先生はそのままでいい。先生だからいえる正論があるのでは。それは私たちが大人になって分かるのでは。」

「生徒の思いを価値づけしてくれると嬉しい。そうすると学校が居場所になって、自分を肯定できるのではないか。」

生徒と教師の議論でこの３か月間考えていたことの答えの一つが出た。我々教師は生徒にとって良かれと思って、教師主導で様々な「指導」をしているが、生徒はこのように自分で考え、行動し、社会を担い変革していく主体である。生徒にもっと委ねる、意見を聞く、あんまり難しいことを考え過ぎずに共に創り上げていくと、教師や社会の意識を「ニューノーマル」にしていくことが必要なのではないか、と確信した一日で非常に面白かった。

二日目、自分の実践を様々な方に聞いていただくとともに、他の先生方から意見をいただく。やはり自分は赴任して１年目の『探究』の授業の失敗から、それがうまくいくためには『探究』の授業で、『教科の授業』でどうすべきか、そのための『学校全体の組織や仕組み』を明らかにしていきたいのだということが確認できた。次に福井大学付属義務教育学校の佐々木先生の実践報告をお聞きした。『探究的な理科の授業』の取り組みをじっくりと話された。

「なぜその単元を選んだか。」

「発意の部分に時間をかけた。」

「授業を先導する『探究の地図』を生徒と共に創った。」

等々、面白い。生徒の「探究」のために教師も「探究」する姿に共感するとともに、自分はマネジメントコースのため、「探究」の授業や学校全体の「マネジメント」を話題にしたが、「授業」だけに特化した取り組みをじっくりお聞きするのも非常に楽しかった。

「そもそも我々が教科で３年間（小学校では６年間）の中でつけるべき力は何か。」

「教科の本質を踏まえた上で、単元構成をすべき。」

等々、話題は尽きない。途中で敦賀高校の生徒さんも参加してくれて、「こんな面白そうな授業なら受けてみたいが、プリントの穴埋めしかしてくれない先生にはどうしたらそんな授業をしていただけるのでしょうか。」と聞かれたときには、グループにいた教師、専門家で笑ってしまうとともに、さらに議論が深まるきっかけとなった。面白い！時間が来てしまい、話尽くせなかったのが残念だが、「教科の本質」につながる議論も生徒さんを交えてできて、これもまた非常に有意義な時間をいただいた。

生徒さんを含めた方々とつながり、語り、議論する中で多くの刺激と省察の時間をいただいた。これらを糧としてさらに今後も自分の問いに対して歩みを進めて行きたい。

## 学校改革マネジメントコース２年/坂井市立長畝小学校　齋藤　雅実

以前、「ラウンドテーブルに参加することで活力をもらう。」という言葉を耳にしたことがあります。実践を語り、様々な角度から実践に対する考えを聞き、そして、他の方の実践を聞くことで「活力」になるそうです。初めてのラウンドテーブルの席で、まだ実感を伴わなかった私は、半信半疑でした。

今回、福井ラウンドテーブルに参加させていただき、この言葉を実感することができました。オンラインでの参加形態のため、テーブルを囲むスタイルを

とることはできませんでした。そのため、話される方の雰囲気等、非言語の部分はわかりづらい面はありました。しかし、オンラインだからこそ、その場の雰囲気に隠れない「言葉」が伝わり、その言葉を生み出した方の思考、境涯、ものの見方が言葉の力となって、私に「活力」を与えたのだと思います。私は嬉しさを感じると共に、次のラウンドテーブルが楽しみになりました。こうした「楽しみ」は、毎日の実践の源になると思います。明日から新たな自分なりの実践を展開して、実践を語っていきたいと強く思います。改めて、オンラインでの新たなつながりを作ってくださっている教職大学院の先生方に深く感謝いたします。

さて、今回のラウンドテーブルでの学びは、「気付きこそが最大の学び」ということです。傾聴し合う中で気付くことの素晴らしさを実感することができました。この気付きは、事実を共有し、ふり返ることから絶えることなく見出すことができると思います。まずは実践し、実践を共有し、語り合うことで振り返り、その中で気付きを生み出していきたいと思います。気付きを伴う学びこそ、次の実践に大きな影響を与えていきます。そして、気付きが次の新たな実践を作っていきます。私たち教師の実践は、取り組み方の違いこそあれ、一人一人が誠実に行っていくべきものであると思います。

コロナ禍の中、これまでの常識が通用しないことがあるので、できることから取り組み、授業で子どもたち一人一人が「楽しさ」と「満足」を感じることができるようにしていきたいと思います。「先生、授業楽しかったよ。」「またこんな学習をしたい。」と言われる教師であり続けたいと思います。そして、職場の先生方にも「楽しさ」と「満足感」を感じることができる授業実践と校内研究にしていきたいと思います。それには、私自身が省察を重ね、熟考し、より広い見識をもって成長し学び続けていくことが大切だと思います。

# ラウンドテーブル、初めての「報告」で得た学び

**学校改革マネジメントコース1年/福井市足羽第一中学校　宮口　正樹**

今年 2 月初めてラウンドテーブルに参加し、参加者の多さと賑わいに大変驚いた。今回は Zoom を使って、そして 2 日目には「報告」をするので期待と緊張で臨むラウンドテーブルとなった。

初日、福井県教育庁の清川先生から福井県の「引き出す教育」、「楽しむ教育」の概要と、その推進の土台となる「働き方改革」について話題提供をしていただいた。その中でも、「時代が変化している中で、学校教育だけが変化していないのではないか。」という問いは、日々の実践を見直していかなければならないと痛感させられるものであった。

岐阜の宮島先生、丸岡高の島田先生、福井大学の牧田先生からはコロナ禍の中で、生徒や院生達の学びの保障にどう取り組まれたかという報告であった。先の見えない状況の中で、ICT 等を活用しながら、それぞれのお立場でのチャレンジを伺うことができた。

翌日初めて「報告」させていただいた。グループの河合先生や伊藤先生は共に本校に関わりがあるとお聞きし、学校や地域について失礼な発言があるかもしれないことを事前にお詫びした。

教職大学院では、学年主任として、リーダーシップを発揮し、学校や学年の組織を如何にマネジメントするかを問い続けていく。

探究の 1 つ目の柱は「学力向上」である。今の学年が入学したときから卒業までを見据えて、学年の先生方と協働しその取組を進めてきた。教員の大切な使命の 1 つであるだけでなく、学年の生徒に学習に対する課題を感じたのがきっかけであった。報告ではいくつかの具体例を紹介した。事例の 1 つ、「数学レベルアッププリント（LUP）」では、そのネーミングも称賛していただき、大変ありがたい思いをした。

もう１つの柱は「生徒支援」である。私自身が不登校対応に悩んでいる時、教職大学院で読んだ理論書によって「コミュニティ」という新たな視点を持つことができた。改めて複雑化・多様化する教育課題に対して「学び続ける」ことの大切さを報告させていただいた。聞き手の先生方から、ねぎらいや温かい励まし、そして今後のエネルギーをいただいた。

今回の「報告」でいろいろなことが分かった。資料をまとめることで、実践を省察することができた。取組を評価していただき、自信とさらなる意欲をもつことができた。そのことは、学年教員とも共有することができた。助言からは、保護者との連携強化も期待できた。「報告」にも、教職大学院での学びがあると感じた。

学校が再開し、忙しい日常が戻りつつある。そんな中での大変有意義な 2 日間であった。コロナ禍の中で、参加と「報告」の機会をいただいたことに大いに感謝して、今回のラウンドテーブルのまとめとしたい。

【 編集後記 】今年度は４月のカンファレンス準備会、５月合同カンファレンス、６月ラウンドテーブル、７月合同カンファレンス、そして夏の集中講座とこの間ずっとオンラインで実施してまいりました。運営面等でみなさんにご迷惑をおかけしていることも多々あり申し訳なく感じておりますが、今回お寄せいただいた原稿を通じ、院生のみなさんがこの形での協働探究に意義や価値を見出してくださっていることが確認でき、嬉しく、励まされました。残暑が大変厳しい中、新学期が始まりました。くれぐれもお体を大事にお過ごしください。（Y.Y）

教職大学院 Newsletter　No.138
2020.8.19 内報版発行
2020.9.19 公開版発行
編集・発行・印刷
福井大学大学院　福井大学・
奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学
連合教職開発研究科
教職大学院 Newsletter 編集委員会
〒910-8507　福井市文京 3-9-1
dpdtfukui@yahoo.co.jp